

京都の鳥

一二三冊子

職を辭し、京都に移り住みてはや五年を経たり。住處は桂川の畔にて、河川敷叢林には様々なる野鳥、棲息す。春より夏にかけて聞ゆる鶯の聲は、毎年の楽しみなり。鶯の中にもその鳴くやおろそかなるあり。「ホーホケキョ」にあらずして「トツポーチーチョ」なるやうに聞えし聞ゆる鳥もありけり。そも既に死にたりや。今は聞えずなりぬ。

早朝、磯鴨（イソヒヨドリ）なる鳥の澄みて美しき声を聞くこともしばしばなり。また、夕方の散歩時には、対岸より、葭切（ヨシギリ）、異名、行々子（ギヤウギヤウシ）の聲、その名に負ふ如く、仰仰しく鳴きとよむ。秋より冬にかけては、尉火焚（ジヨウビタキ）の愛らしき姿を身近に見ることを得。腹は橙色にて羽に白き斑あり。その可愛らしき姿に似ず、縄張り意識強き鳥といふ。毎朝ほぼ同じ場所にて見かくるは、己が縄張りを見回りをるならむ。

縄張りと言へば、鳥と鳶との縄張り争ひを見かくることもあり。五月、鳥の産卵期なり。鳥の巢に鳶近づくと、數羽の鳥、空中にて鳶に突進し飛びかかること幾たびか。鳶は「ヒー——」とかん高き聲を上げて必死に逃げ行くなり。さはあれど鳥、遠き西の空の果てに鳶を追ひ拂ふまで、追撃止むることなし。かくも勇敢なる鳥と對照的に、鳶いと哀れなり。觀光地にて觀光客の食べ物を狙ひて襲ひかかる獐猛なる鳶の姿とは程遠し。この時のみは、鳶を應援したき思ひに驅らるるなり。

我、かつて鳶に激突せられしことあり。河川敷の草原を犬と散歩せし折、犬におやつを與へむと袋から犬の菓子を出しつつある右手にドスンと衝撃を受けり。一瞬何がぶつかりしかと惑ひし視界の右端に、飛び去る鳶の姿あり。幸ひにして嘴や爪による怪我はなかりけり。ただ、鳶の目の良さに驚嘆せり。犬のおやつ入りし小さき袋を高い空より見付け、そを目掛けて舞ひ降るるなれば。電網によれば、鳶の視力八・〇、二ミリメートルの物を五〇メートル先より見つけることを得とのこと。もはや想像を絶する世界なり。

因みに、小鳥の鳴くを「囀る」と言ふ。さるスペイン人、この言葉を聞きて、「美しき日本語なり」と感激せり。それまで、我、さほど美しき言葉と感ぜしことなければ、改めて美しき言葉なることに氣づかさるる思ひなり。最近の日本人、この言葉を使ふこと稀になりつつあらずやと危惧す。「囀る」に限らず、美しき日本の言葉の廢るることなきやう、心して使はむとこそ思ひぬれ。

（令和七年七月十三日受附）